

はじめに

2003年から始めた挑戦がとうとう10年目になりました。よく続いたものだと自分ながらに感心したり、そろそろ潮時かなと感じたり、ちょっぴりセンチメンタルな気分になったりもします。

スタートの頃には、大阪教育大学米文学研究室（橋本賢二）に集う学生たちと協同で研究調査を行い、その成果を本の形にして残し、学内に配布した後、全国の大学や都道府県の図書館、教員、学会、マスコミ、関連企業、関係者等に寄贈するという試みでした。当初教員以外の執筆者は専門の学生だけでしたが、徐々にその幅は広がり、やがて教養学科のみならず教員養成課程の専門を異にする数多くの学生も含めた大人数の活動になって行きました。

執筆者の国籍もアメリカ、インド、中国、韓国、台湾など国際的なものとなり、英語、フランス語、中国語などを使用し国際色豊かになっていきました。海外に本を送りし礼状が届いたり、ドイツの国立図書館から寄贈を求められたりと、思わぬ反響に驚くことも多々ありました。

そしてインターネットの成熟期に達し、完成した論集を本学図書館のインターネット公開サービス、リポジトリより無料で全文公開することになっていきました。元来、大阪教育大学 欧米言語文化講座（英語圏）ではどのような教育が行なわれているのかを世界に情報発信したいという希望があったためにこの展開は望むところでした。

10年一昔といいますが、その間に作成した論集のテーマはいろいろありました。ざっとタイトルを挙げると次のようになります。

『アメリカ—エンターテインメントの世界—』（2003年度）

『日本で見つけたアメリカ—戦前日米交流史—』（2004年度）

『米文学史のなかのアメリカ文化研究』（2005年度）

『ジャパニーズ・ポップ・カルチャー 2006—日本の若者・大衆文化のいま—』（2006年度）

『実学としてのアメリカ文学研究—歴史・人物・作品・映画から学んだこと—』（2007年度）

『アメリカ映画研究を始めるまえに』（2008年度）

『物語の魔力—欧米文学を再話して—』（2009年度）

『涙の効用—泣かせる力、泣くという手段—』（2010年度）

『場所が持つ磁力』（2011年度）

こうして見返すと、アメリカ文学・文化研究から始まり、だんだんとその幅を広げ、比較文化から文学自体の本質や、教育といったものにも関心が移ってきたことも感じ取れます。

その出来上がりはともかく、どの回にも理想は高く掲げ、夢を語り合いながら、なんとかこの活動が意味あるものであって欲しいと願いつつ活動を進めていきました。ややこしいテーマに挫折しそうになる学生たちを励ましながら何とか終着点までたどり着こうと苦慮しました。不運はポジティブに捉え、与えられた限られた条件の中で最善の努力を目指してきました。途中で数多くの障害にぶつかりながらも、予算面、執筆者の数、時間の問題などを次々と乗り越え、最後には何とか生み出してきました。それは常に不安と闘いながらの年度内完成でしたが、それを何度もやっているうちに何か知れない自信が生まれてもきました。それは私が感じただけでなく、学生たちにも少しは伝わったのではないのでしょうか。

協力する力の大きさは計り知れません。これも学生たちと知り合えたからこそ生まれた活動でした。自分ひとりでは生み出すことのできない成果です。素晴らしい学生たちに恵まれたことを感謝しています。

偶然の出会いがあっても、またそこから一歩踏み出し研究、執筆に進むためにはまた何らかのモチベーションが必要です。その力はなんだったのか。若さだったのか、夢だったのか、もしかすると、単なる一人合点のゴリ押しだったかもしれないし、学生側からすれば成り行きによる単位欲しさの付き合いだったのかもしれないし、受講後の引くに引けない妥協策だったのかもしれない。または現実を認識しない夢見る教師に手を貸そうとする学生ボランティアたちの慈善活動だったのかもしれないし、変なテーマを立てて楽しんでいる先生に刺激を受けて、一度その世界を覗き込んでみようという好奇心に駆られた若者たちの自発的活動だったのかもしれない。などと考えるにつけ、浮かぶ結論は「ほんとうにいい学生たちと出会えた」ということに尽きます。こんな難しいことを聞いて簡単に理解できる学生たちもそんなに多くはないというのが実感でした。そして今はただすべての出会いに幸運を感じています。

今年に入り図書館のネット公開における個人情報の基準、取り扱いが厳しくなってきました。昨年度の論集『場所が持つ磁力』はネット公開するに当たり、すべての執筆者から論文題名と該当ページを記した公開の同意書ほかを取り付け、事前に提出しなければならなくなりました。そのため当初の公開は教員の執筆部分だけになり、閲覧者数も減ってしまいました。その後、今年度に顔を合わせるようになった多くの学生にお願いして、同意書を取り付けかなりの部分が公開できるまでになっています。

このような展開を見るにつけても、時代の移り変わりを感じ、このような活動を続けていくことのむつかしさをいっそう強く感じるようになってきました。今年はもう作成しない予定でしたが、専門クラスに思わぬ数の受講者が集まりまた考えを改め、もう一年続けることにしました。

(大阪教育大学 教育学部 教養学科 文化研究専攻 欧米言語文化講座
米文学研究室 橋本 賢二)